

自己愛的人格における誇大特性と過敏特性

相 澤 直 樹¹

本研究では、誇大特性と過敏特性からなる自己愛的人格項目群を作成し、自己愛的人格の構造を検討した。まず、67項目からなる自己愛的人格項目群を作成し、YG 性格検査の10下位尺度とともに一般の大学生・大学院生545名に実施した。得られたデータにプロマックス回転による因子分析を施したところ、“対人過敏”、“対人消極性”、“自己誇大感”、“自己萎縮感”、“賞賛願望”、“権威的操作”、“自己愛的憤怒”の7因子が抽出された。その後、これらの下位尺度について、項目一総得点間相関と α 係数を用いて内的一貫性を検討した。また、YG 性格検査との関係を検討したところ、各下位尺度の併存的妥当性が確かめられた。次に、共分散構造分析を用いて自己愛的人格項目群の潜在変数に関するモデルを検討した。モデル1は、2つの独立的な潜在因子が別々に誇大特性下位尺度と過敏特性下位尺度を規定するという仮説から構成された。モデル2は、“誇大自己”と“萎縮自己”の2つの自己イメージから“自己愛的傷つき易さ”が生じるという潜在因果関係により構成された。分析の結果、両モデルにおいてすべてのパス係数は有意な値を示したが、十分な適合度 (GFI) を示したのはモデル2のみであった。以上の結果について、誇大特性と過敏特性を含む自己愛的人格を包括的にとらえる視点から考察を行った。

キーワード：自己愛的人格、誇大特性、過敏特性、自己愛的傷つき易さ、共分散構造分析

問 題

自己愛 (narcissism) という概念は一般的によく用いられるものであり、その具体像は一見明白なように思われる。そして、自己愛を性格の一つとしてとらえた自己愛的人格という概念も、簡潔明瞭なように思われるかもしれない。しかし、その実像を把握することは予想以上に困難である。

自己愛に関する心理学的研究は、1970年代から80年代にかけて自己愛的人格障害 (以下 NPD とする) の研究の中で特に活発に行われた。その代表的な研究者として、Kernberg (1975) と Kohut (1971; 1977) を挙げることができる。Kernberg (1975) は、Mahler や Jacobson の自我発達理論と Klein の対象関係論の流れを汲み、NPD を病的に発達した誇大自己に起因するものとして論じた。一方、Kohut (1971; 1977) は、独自に構築した自己心理学の観点から、NPD を健康な自己愛の発達停滞として論じた。双方異なる観点から理論を展開しているが、NPD として取り扱った患者の姿も幾分異なっていた。Kernberg は、NPD の患者像として、尊大さ、傲慢さ、賞賛を過剰に求める傾向、他者への共感の欠如など、いくつかの特徴を明確に挙げている。それに対し、Kohut は、この人格障害の診断基準を臨

床場面での特異な転移様反応の発生においているため、あまり明瞭な外的基準を提示していない。しかし、その中でも、主な特徴として軽蔑への過敏さや抑うつ傾向、自発性の乏しさ、心気傾向などを示す患者も NPD として扱っている (Kohut, 1971, p.177 ; 1977, p.193)。両者は診断の視点が異なるため単純に比較できないが、対象とした患者像に差異があったことは間違いないであろう。

80年代に入り、米国精神医学会は DSM-III (American Psychiatric Association, 1980) の中に NPD の診断基準を設けた。その内容は Kernberg (1975) が示したものに近く、誇大性、自己顕示性、他者への無関心さなどを中心としていた。これにより、NPD の諸特徴が、誇大さや自己顕示性などを中心に定式化されたと言える。その後、DSM は第IV版 (American Psychiatric Association, 1994) に改定され現在に至っているが、その間、この誇大で自己顕示的な側面に着目する研究が多く報告されてきた (レビューとして、上地・宮下, 1992ab)。しかし一方で、Kohut が取り上げたような、過敏で抑うつ的な特徴や類型を指摘する研究者も少なくない。Akhtar & Thomson (1982) は、NPD の先行研究を概観し、DSM-III が提示したような顕在的な NPD とは別に、過敏さや劣等感、他者への羨望や不満感を示す、隠された NPD という分類を提示した。Rosenfeld (1987) は、治療的対応の観点から、感情を感じにくい鈍感な (thick-

¹ 神戸大学大学院総合人間科学研究科
神戸市灘区鶴甲3-11 078-803-7956

skinned) 自己愛的患者と、過敏で傷つきやすい敏感な (thin-skinned) 自己愛的患者という分類を示した。Masterson (1981) も、臆病で無力であるが、治療の中で幻想的な誇大自己を表す、ひきだし型自己愛者 (closet narcissist) という類型を指摘した。

以上の流れの中で、現象学的・記述的観点から包括的な NPD の下位分類を提示したのが Gabbard (1994) である。Gabbard (1994) は、従来の様々な下位類型が、無関心な自己愛者 (oblivious narcissist) と過剰警戒的な自己愛者 (hypervigilant narcissist) という2つの類型を両極とする連続体上に位置づけられるとした。前者は、傲慢・自己没頭・注目願望・自己主張性・他者への関心の低さなどを主な特徴とする類型であり、DSM-III が提示した NPD の診断基準に近い。一方、後者は、内気・自己抑制性・他者回避性・傷つき易さなどを主な特徴とする類型である。そして、実際の患者は、両タイプのいずれかが顕著なものか、両者の特徴が混在した様相を示すと論じた。この研究により、NPD の過敏で傷つき易い特徴がより明確化されたと言える。最近の研究では、Asper (1987) がユング派の観点から自己愛的障害の病理と治療について論じている。そこで上記の分類学的な問題が直接論じられている訳ではないが、見捨てられ不安や抑うつ、羞恥心などに悩む自己愛的障害患者の姿がより詳細に示されている。

一般健常者を対象とした実証的研究の中でも、過剰警戒型の特徴を示唆する研究が散見される。自己愛的人格の尺度としては、Raskin & Hall (1979) の Narcissistic Personality Inventory が頻繁に用いられるが、これは DSM-III に基づいて作成されており、無関心型の特徴を中心とする。一方、Mullins & Kopelman (1988) は、自己愛に関する4つの尺度に因子分析を施し、リーダーシップや注目願望などの誇大的な因子以外に、不快感や過敏さを意味する因子も抽出した。また、Wink (1991) は MMPI の6つの自己愛尺度に主成分分析を施し、誇大性・顕示性の次元と傷つき易さ・過敏性の次元の2つの主成分を抽出した。その他、高橋 (1998) は、Gabbard の分類に基づいて項目群を構成し、無関心型に属する因子と過剰警戒型に属する因子を抽出した。これらの研究は、一般健常者を対象とした実証的研究でも、過剰警戒型の諸特徴が抽出されたことを示している。

以上のような分類学的な議論が展開される一方で、この2つの類型を自己愛的人格に含めるとすると、また別の問題が生じてくる。それは、両者が外見的に大きく異なっていて、部分的には正反対とも言える特徴

を示すことである。それゆえ、自己愛的人格とはいったい何を意味するのかという疑問が生じる。また、この問題は、ナルシストの一般的なイメージが無関心型に近いために、過剰警戒型を自己愛的人格の特徴に含めるべきなのかという議論にも結びつく。

外的特徴に一貫性が見られにくいならば、内的要因に関する議論が必要となる。現在に至るまで、多数の研究者が自己愛的人格の心理構造について論じてきた。その中でも、特に過剰警戒型も含めた自己愛的人格論を提示したのが岡野 (1998) である。岡野 (1998) は、自己愛的人格の心理的要因として、極度に理想化された自己イメージである理想自己と、それに比して過剰に卑下された現実自己である恥ずべき自己の2極構造を仮定した。そして、極端な理想自己への同一化傾向による自己評価の高揚と、現実場面での恥ずべき自己への直面化による自己評価の急激な低下という循環的運動が、恥や対人的な傷つき易さをもたらすと論じた。同時に、理想自己と恥ずべき自己のいずれに精神生活の拠点がおかれるかという点には個人差があり、その程度により無関心型の特徴が強く見られたり、過剰警戒型の特徴が強く見られたりするという観点を提案した。つまり、極端な理想自己と恥ずべき自己の2極構造の中で、主に理想自己の方が中心となっていると、傲慢さ・自己没頭・注目願望・自己主張などの特徴が強まり、逆に恥ずべき自己が中心になると、内気さ・他者回避性・傷つき易さなどの特徴が強まると考えられる。この理論によると、極端な理想自己と恥ずべき自己、及び、両者間の変動として生じる自己愛的な傷つき易さという内的要因によって、自己愛的人格の諸特徴が規定されと考えられる。先行研究との関係では、極端な理想自己が、Kohut の言う蒼古的誇大自己、Kernberg の言う病的誇大自己、Masterson の言う誇大自己-万能対象融合単位に相当する。一方、恥ずべき自己は、Masterson の攻撃的で空虚な対象関係融合単位が相当し、恥ずべき自己への直面化による恥の体験が、Kohut の言う自己の断片化にあたるものと考えられる。

以上の他にも、従来自己愛的人格に関しては数多くの研究がなされてきた (上地・宮下, 1992ab)。それらは、大別して事例に基づく臨床心理学的・精神医学的研究と、心理テストや質問紙を用いた心理学的実証研究とに分けられる。前者の中では、前掲の Gabbard (1994) や岡野 (1998) のように、近年になって過剰警戒型を含めて自己愛的人格を論じる研究が増えてきている。しかし、後者では、無関心型にのみ注目した研究がほと

んどであって、過剰警戒型を含めて研究を行ったのは概ね高橋 (1998) や高橋 (1998) を見るのみである。個性記述的な事例研究で得られた知見に対し、心理学的な実証的研究を通じてその一般妥当性を検証することの重要性を考慮すると、過剰警戒型を含めた心理学的実証研究は重要な課題であると思われる。そこで本研究では、質問紙法を用いて過剰警戒型を含めた自己愛的人格の特徴を再検討し、その後、潜在的関係に関する仮説を検討することとした。同様の項目群としては高橋 (1998) と高橋 (1998) によるものがあるが、項目数と因子数が少なく、後述する仮説を詳しく検討するには十分なものではないと思われた。そこで、新しく自己愛的人格項目群を作成することから開始した。さらに、その妥当性を検討するために、YG 性格検査の一部を用いた。調査対象としては、Kohut (Elson, M., 1987) や小此木 (1981) が、自己愛的人格と青年期の密接な関係を指摘している。また Hosoi (1981) は、青年期における自己愛的傾向の漸増現象を検証している。自立の最終的段階にあたるこの時期において、自己評価への関心の高まりが自己愛的傾向を強めるということは十分考えられることであった。そこで、調査対象には青年期の男女を選択した。

自己愛的人格項目群の検討にあたっては、以下の手法を用いた。第一段階として、項目全体に対する探索的因子分析を実施し項目の分類を試みた。さらに第2段階として、先行研究を参考に潜在変数を仮説し、共分散構造分析 (構造方程式モデル) を用いてその妥当性を検討した。その際、以下の2つのモデルを検討することとした。1つは、無関心型と過剰警戒型が別々の人格特性である可能性を考慮して、両類型の諸特徴がそれぞれ別々の潜在変数により規定されると仮定したものであり、これをモデル1とした。もう1つは、前述の人格理論を参考に、自己愛的人格を一次的に規定する要因として、岡野 (1998) の言う理想自己と恥ずべき自己に相当するものとして誇大自己と萎縮自己という2つの潜在変数を仮定し、それらがもたらす対人傾向として自己愛的傷つき易さという潜在変数を仮定した。これをモデル2とした。

なお、無関心型と過剰警戒型という分類に関して、Gabbard 自身も、“これらの2つのタイプは純粋な形でも生じるが、患者の多くは2つのタイプの混合した現象的様相を呈する (Gabbard, 1994 館訳, 1997, p.91)”と述べていることから、類型としてよりも特性として論じた方が妥当であると思われた。また、無関心型や過剰警戒型という表現も日本語には馴染みがたいように

思われた。これらの点を考慮し、以下では無関心型と過剰警戒型という表現のかわりに、誇大特性と過敏特性という概念を用いることにした。

方 法

1. 調査対象

京都府、大阪府、兵庫県の大学生・大学院生545名(男249名・女296名)。平均年齢20.3歳 (18~25歳)

2. 測定尺度

(1)自己愛的人格項目群

自己愛的人格を測定する項目群は、先行研究から収集した。用いられたのは、Raskin & Hall (1979, 大石訳, 1987) の Narcissistic Personality Inventory, Murray (1938, 外林訳, 1961) の Personality Inventory 中の Narcissism 項目, O'Brien (1987) の O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory, Mullins & Kopelman (1988) の自己愛項目群, 高橋 芳 (1998) のナルシズム的人格尺度であり、邦訳がなされていないものについては筆者自身が訳した。ただし、過敏特性に関する先行研究が少ないため、項目が不十分であると考えられた。そこで、岡野 (1998) や近藤 (1995) が過剰警戒型と対人恐怖の近似性を指摘していることから、2つの対人恐怖傾向尺度の項目も含めた (田中・穂苅・福田・小川, 1994; 相澤, 1997)。以上の項目群を筆者と臨床心理学の大学院生2人で上位項目群に整理し、その項目群から2項目ずつを選択した。ただし、上記の手続き上、自己愛的人格にあたらない項目も含まれている可能性があったので、Gabbard (1994) が挙げた無関心型と過剰警戒型の諸特徴、及び、Asper (1987) が挙げた自己愛的障害の特徴をもとに項目を選定した。その結果、誇大特性に属する34項目、過敏特性に属する33項目が収集され、それら全体を自己愛的人格項目群とした。最終的に文体に若干の修正を施し、「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの5段階評定で対象に実施した。

(2) YG 性格検査

本研究では、自己愛的人格項目群の妥当性を検討するために、YG 性格検査の下位尺度のうち関連が予想されるもの、すなわち D (抑うつ性) 尺度、C (回帰性傾向) 尺度、I (劣等感) 尺度、N (神経質) 尺度、O (客観性欠如) 尺度、Co (協調性欠如) 尺度、Ag (愛想の悪いこと) 尺度、T (思考的外向) 尺度、A (支配性) 尺度、S (社会的外向) 尺度の10下位尺度を、「1 あてはまらない」から「3 あてはまる」までの3段階評定で実施した。

3. 手続

以上の2つの尺度からなる質問紙を配布した。配布

方法は、ほとんどが大学の講義時間になされ、その場で回収されたものと後日回収されたものがあった。一部は郵送により配布と回収を行った。調査期間は、2000年12月～2001年6月であった。

結 果

1. 自己愛的人格項目群の因子分析

まず、各項目の度数分布を検討した結果、特に極端な問題を示す項目はなかった。そこで、誇大特性項目と過敏特性項目に分けて、項目一総得点間相関を算出した。その結果、前者で5項目(項目9, 14, 23, 29, 32)、後者で2項目(項目7, 14)が.20以下の値を示したのでこ

れを削除した。その後、自己愛的人格項目群を下位分類するため、全体に探索的因子分析(主因子法)を施した。因子回転は因子間の相関を許容する斜交回転(プロマックス法)を用いた。因子数は、内容的妥当性と分散の説明率を考慮して、8因子解を採用した。しかし、複数の因子に同程度に負荷する項目が見られたので、これを削除した(誇大特性項目5, 7, 11, 16, 17, 19, 24, 30, 33; 過敏特性項目4, 29)。結果、第8因子の項目が一つのみとなったためこれも削除し(過敏特性項目9)、因子数を7因子として再度因子分析を施し、最終的な7因子構造を確定した。7因子全体での累積寄与率は42.11%であった。結果をTABLE 1に示す。

TABLE 1 自己愛的人格項目群の因子パターン行列(主因子法・プロマックス回転)

	FAC. 1	FAC. 2	FAC. 3	FAC. 4	FAC. 5	FAC. 6	FAC. 7
b20. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる	.79	-.12	-.11	.04	.05	-.05	-.01
b17. 自分が他人にどのような印象を与えているのか、とても気になる	.76	-.14	-.07	-.03	.29	-.18	.04
b22. 人という、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	.70	.18	.02	-.16	-.05	.13	-.04
b26. 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	.67	.12	-.08	-.15	-.08	.03	-.08
b11. 周りの人の視線が気になり落ち着かない	.63	.23	.08	-.13	-.09	-.18	.07
b21. 周囲の視線が気になって、動作がぎこちなくなる	.60	.24	.10	.00	-.04	-.15	-.00
b05. 失敗するのではないかといつも不安になる	.56	-.11	.01	.37	.03	.13	.02
b15. 少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する	.50	-.03	.01	.07	.16	-.18	.25
b16. 先のことをよくよく考えすぎる	.50	-.12	.13	.34	-.04	.05	-.02
b08. 何かにつけ、他人の方が上手くやっているように感じる	.48	-.06	-.15	.26	.04	.14	.07
b24. 自分に自信がない	.46	.12	-.21	.27	.01	.09	-.10
b18. 人としても自分だけが取り残されたような気持ちになる	.45	.30	-.05	.01	.04	.13	-.02
b10. 大勢の人の前にいると、自分が圧倒されてしまう	.37	.13	.13	.21	-.15	-.20	-.04
b30. 人と自然に付き合えない	.02	.81	-.02	-.08	-.09	.09	-.04
b32. 人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない	-.04	.73	-.10	.05	.02	-.02	.06
b23. 人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず、人を避けてしまう	.17	.72	.03	-.08	.06	.04	-.10
b06. 人と心から打ち解けて付き合うことができない	-.09	.67	-.15	-.04	-.08	.23	-.01
b33. 内気な方である	-.16	.55	.01	.40	-.10	-.00	.08
b31. 人と対面すると、相手を意識して緊張する	.20	.50	.01	.07	-.01	-.08	.06
b03. 知っている人を見かけても、顔を合わさないように道を避ける	.16	.42	-.00	.02	.07	.03	-.04
b02. 無理して人に合わせようとして、窮屈な思いをする	.21	.33	.04	.18	.14	-.04	-.01
a20. 私にはもって生まれたすばらしい才能がある	-.03	-.06	.73	.00	-.02	-.07	.02
a31. 他の人とは違って、自分は大いまいましい存在である	.08	.03	.62	.03	-.07	.17	-.05
a10. 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ	-.01	.01	.57	-.00	.16	-.05	-.05
a12. 自分の思想や感性にはかなり自信がある	-.10	.03	.54	-.05	.01	-.00	.12
a18. 自分はきっと将来成功するのではないと思う	-.09	-.02	.54	.05	.20	-.13	-.04
a02. 私は今までに大いまいましい経験を積んできた	.11	-.26	.46	.02	-.21	.09	.00
a08. 自分の体を人に自慢したい	-.12	.05	.40	.13	.07	.16	.03
a03. 自分自身では、要領もいまいましい賢明さも備えていると思う	-.10	.09	.36	-.29	-.01	-.02	-.05
a15. 自分が偉大な人間になっているような空想をする	.10	.10	.34	.09	.13	.23	-.10
b01. 気が弱い	.12	.02	.03	.71	.05	.08	.01
b25. 決断力がない	.14	.02	-.07	.54	.06	.10	-.12
b28. 引っ込み思案である	-.05	.43	.05	.49	-.06	-.01	.04
b13. 自分の意見が正しいと思って強く主張できない	.28	.11	.14	.43	-.05	-.08	-.13
a27. 人の注目を浴びるのが好きだ	.03	-.08	.08	.06	.78	.07	-.07
a21. 人から賞賛されたいという気持ちが強い	.19	.11	.01	.03	.63	-.08	.13
a25. ここぞという時には大胆に自己アピールをしたい	-.05	.02	.14	-.10	.35	.10	.06
a04. 人前で発表したり演技をしたりするのが得意だ	-.09	-.11	.16	-.18	.29	.20	-.05
a01. 人の話に耳を傾けるよりも自分のことをもっと話したい	.09	-.21	.01	.02	.24	.19	.04
a13. 自分の役に立つかどうかで友達を選ぶことは、正当なことである	-.11	.05	.10	.18	-.04	.49	.13
a26. 人々を従わせられるような権威をもちたい	.13	.04	.10	-.13	.12	.48	.03
a06. 必要ならば罪悪感を感じることなく、人を利用することができる	-.15	.09	.03	-.02	.01	.42	.06
b19. 根気がなく何をしても長続きしない	-.05	.06	-.17	.25	.08	.38	.02
a28. 私の意見や考えに周りの人を従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのと思う	.12	.03	.23	-.03	.03	.33	.12
b12. 人に軽く扱われたことが、後々腹が立って仕方がないことがある	.12	.04	-.03	-.10	-.03	.18	.65
a34. 人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りを抑えられなくなる	.03	-.07	-.00	-.02	.04	.07	.55
a22. 人から不当な評価を受けることには我慢がならない	-.15	.14	-.01	-.02	.34	.02	.52
b27. 対人場面でその場は何とも思わなくても、後々腹が立つ事がある	.24	-.13	.04	-.07	-.19	.22	.45

a…誇大特性項目 b…過敏特性項目

次に、各因子に高い負荷を示す項目群の内容から、因子の意味について検討した。いずれの項目群も内容的に概ね統一性が見られた。それぞれの内容から、第1因子は“対人過敏”，第2因子は“対人消極性”，第3因子は“自己誇大感”，第4因子は“自己萎縮感”，第5因子は“賞賛願望”，第6因子は“権威的操作”，第7因子は“自己愛的憤怒”と命名された。第6因子には、「根気がなく何をしても長続きしない」という内容的に一貫しない項目が含まれていたが、これは権威的操作的態度の背景にある「自分は動きたくない」という態度を反映したものと考えられた。次に、各項目群の構成を見ると、第3因子・第5因子・第6因子にはほぼ誇大特性項目のみが属しており、第1因子・第2因子・第4因子には過敏特性項目のみが属している。このことから、これらの因子レベルでも両特性の項目がほぼ分割されたと言える。第7因子のみが両者の項目を等しく含んでおり、一見どちらに属するとも言い難い。しかし、DSM-IIIの診断基準や Gabbard (1994)の分類では、自己愛的憤怒は主に誇大特性の中に含まれていることから、内容的に見て誇大特性に属するものと考えられた。なお、因子分析の結果得られた各下位尺度ごとに項目一総得点間相関を算出したところ、全て.30以上の値を示し、ほとんどが.35～.50程度の値を示した。また、 α 係数は、各下位尺度で.905, .860, .770, .752, .687, .591, .691であった。因子間相関と下位尺度間相関を TABLE 2 に示す。

TABLE 2 因子間相関 (右上) と下位尺度間相関 (左下)

	対人過敏	対人消極性	自己誇大感	自己萎縮感	賞賛願望	権威的操作	自己愛的憤怒
対人過敏	1.000	.568	-.109	.413	.042	.213	.475
対人消極性	.652**	1.000	-.102	.500	-.202	.024	.372
自己誇大感	-.174**	-.135**	1.000	-.435	.393	.303	.152
自己萎縮感	.619**	.618**	-.312**	1.000	-.368	-.347	.171
賞賛願望	-.063	-.192**	.461**	-.334**	1.000	.272	.203
権威的操作	.196**	.147**	.304**	-.012	.313**	1.000	.211
自己愛的憤怒	.400**	.288**	.181**	.099*	.296**	.399**	1.000

* $p < .05$ ** $p < .01$

2. YG 性格検査の項目分析

YG 性格検査の各下位尺度毎に、項目一総得点間相関を算出した。概ね.30以上の値を示したが、O 尺度、Ag 尺度、T 尺度のそれぞれで、1 項目ずつ.20以下の値を示すものが見られた。そこで、これらの項目を分析から削除することも考えられたが、既存の性格検査であることからそのまま用いることとした。 α 係数は、D 尺度.855, C 尺度.777, I 尺度.810, N 尺度.784, O 尺度.661, Co 尺度.794, Ag 尺度.675, T 尺度.695,

A 尺度.784, S 尺度.821であった。

3. 自己愛的人格項目群と YG 性格検査の相関

自己愛的人格項目群の下位尺度ごとの妥当性を検討するため、YG 性格検査との相関係数を算出した。

誇大特性に属する下位尺度と YG 性格検査の相関係数を TABLE 3 に示す。下位尺度の妥当性については、まず自己誇大感で、AG 尺度と A 尺度の間に弱いながらも正の相関が見られ、I 尺度との間に負の相関が見られた。また、賞賛願望では、AG 尺度、A 尺度、S 尺度との間に弱いあるいは中程度の正の相関が見られた。AG 尺度が攻撃性だけでなく、一般的な実行力や積極性も意味することを考慮すると (八木, 1987), 以上の結果は下位尺度の妥当性を支持するものと言える。また、権威的操作で Co 尺度と AG 尺度の間に、自己愛的憤怒で C 尺度、N 尺度及び AG 尺度の間に、それぞれ正の相関が見られたことは、これらの下位尺度の妥当性を支持する結果である。一方、各下位尺度と YG 性格検査の相関係数のパターンを見ると、YG 性格検査の情緒不安定性因子 (D, C, I, N) と社会不適応因子 (ただし AG を除く O, Co) との関係で、4 尺度が 2 群に分けられることが分かる。つまり、自己誇大感と賞賛願望では、情緒不安定性因子と社会不適応因子との間にほとんど相関が見られないのに対し、権威的操作と自己愛的憤怒では、弱いあるいは中程度の正の相関が見られた。この結果は、誇大特性が必ずしも一元的ではないことを示唆すると同時に、後述する各下位尺度の特徴を反映しているものと考えられる。

TABLE 3 誇大特性下位尺度と YG 性格検査の相関

	自己誇大感	賞賛願望	権威的操作	自己愛的憤怒
D (抑うつ性)	-.063	.016	.287**	.386**
C (回帰性傾向)	.017	.203**	.305**	.413**
I (劣等感)	-.238**	-.100*	.175**	.324**
N (神経質)	-.010	.062	.315**	.527**
O (客観性欠如)	.149**	.180**	.298**	.374**
Co (協調性欠如)	.099*	.125**	.492**	.480**
Ag (愛想の悪さ)	.373**	.434**	.335**	.440**
T (思考的外向)	-.164**	-.062	-.211**	-.282**
A (支配性)	.296**	.451**	.019	-.068
S (社会的外向)	.202**	.400**	-.041	-.125**

* $p < .05$ ** $p < .01$

過敏特性に属する下位尺度と YG 性格検査の相関係数を TABLE 4 に示す。各下位尺度の妥当性に関しては、まず対人過敏で、D 尺度、C 尺度、I 尺度、N 尺度との間で強いあるいは中程度の正の相関が見られたこと、及び、A 尺度、S 尺度との間で中程度の負の相関が得られたことから、妥当性は支持されたものと言

TABLE 4 過敏特性下位尺度と YG 性格検査の相関

	対人過敏	対人消極性	自己萎縮感
D (抑うつ性)	.638**	.516**	.383**
C (回帰性傾向)	.437**	.279**	.217**
I (劣等感)	.813**	.567**	.652**
N (神経質)	.731**	.568**	.435**
O (客観性欠如)	.443**	.372**	.188**
Co (協調性欠如)	.529**	.439**	.228**
Ag (愛想の悪さ)	.011	-.117**	-.300**
T (思考的外向)	-.457**	-.383**	-.217**
A (支配性)	-.449**	-.673**	-.673**
S (社会的外向)	-.422**	-.702**	-.526**

*p<.05 **p<.01

える。また、対人消極性では、D尺度、I尺度、N尺度、Co尺度との間で強い負の相関が見られたこと、同時にA尺度、S尺度との間で強い負の相関が得られたことから、同じく妥当性は支持されたと言える。最後に、自己萎縮感で、D尺度、I尺度、N尺度との間に中程度の正の相関が見られ、A尺度、S尺度との間に中程度の負の相関が見られたことから、ここでも下位尺度の妥当性が支持されたと考えられる。一方、ここでは各々の相関係数のパターンに大きな違いは見られなかった。しかし、YG性格検査の情緒不安定性因子と社会不適応因子（AGを除く）との関係では、対人過敏が最も強い値を示しており、以下対人消極性、自己萎縮感の順に値が弱まっている。また逆に、YG性格検査の主導性因子（A、S）との関係では、対人過敏が最も弱い負の相関を示しており、対人消極性と自己萎縮感が同程度の強さの負の相関関係を示している。以上の結果は、後述する各下位尺度の特徴を反映しているものと思われる。

4. 自己愛人格項目群の共分散構造分析

次に、各下位尺度ごとの総得点を観測変数として、共分散構造分析（構造方程式モデル）を通じてモデルの適合性を検討した。

まず、誇大特性と過敏特性のそれぞれが別々の潜在変数で規定されるとするモデル1を検討した。各下位尺度のうち、自己誇大感、賞賛願望、権威的操作、自己愛的憤怒、対人過敏、対人消極性、自己萎縮感、

自己愛的憤怒が誇大特性に属すると考えられることから、これら4つを規定する潜在変数を仮定し、これを“誇大特性”と命名した。一方、過敏特性については、対人過敏、対人消極性、自己萎縮感に共通する潜在変数を仮定し、これを“過敏特性”とした。最後に、潜在変数間に相関を仮定しモデルを完成した。これを検証するために確認的因子分析を行った（豊田, 1992; 狩野, 1997）。結果をFIGURE 1に示す。パス係数と因子間の相関係数は、いずれも有意であった。しかし、モデルのデータに対する適合度を表すGFIとAGFIの値はそれぞれ.859, .697となり、十分なものではなかった。このことからモデル1はデータへの適合性が低く、棄却されるべきであると判断された。

次に、誇大自己、萎縮自己、自己愛的傷つき易さの3要因を潜在変数として仮定したモデル2を検討した。モデルの構成にあたって、各潜在変数と観測変数の関係は以下のように考えられた。誇大自己は、極端に理想化された自己イメージであり、自己誇大感や万能感をもたらすものと考えられた。同時に、そのような自己イメージを持つ人は、それが周囲の人との間でも肯定されることを望むと考えられた。そこで、誇大自己には自己誇大感と賞賛願望を関係づけた。次に、萎縮自己は、極度に否定的に評価された自己イメージであり、それは自信の喪失や判断力の弱さをもたらすものと考えられた。同時に、そのような自己イメージにとられる人は、対人場面で積極的に行動することができず、引っ込み思案で内気な振る舞いにならざるを得ないものと推測された。そこで、萎縮自己は自己萎縮感と対人消極性に影響を与えるものとした。一方、自己愛的傷つき易さは、誇大自己と萎縮自己の2極構造を背景に持っているが故の、他者からの否定的評価に対する過敏さを意味している。したがって、それは誇大自己を傷つける侮辱や軽蔑に対する拒否的反応に最もよく現れると考えられる。したがって、この潜在変数には自己愛的憤怒と対人過敏を関係づけた。ただし、対人過敏については、否定的評価への予期的不安とし

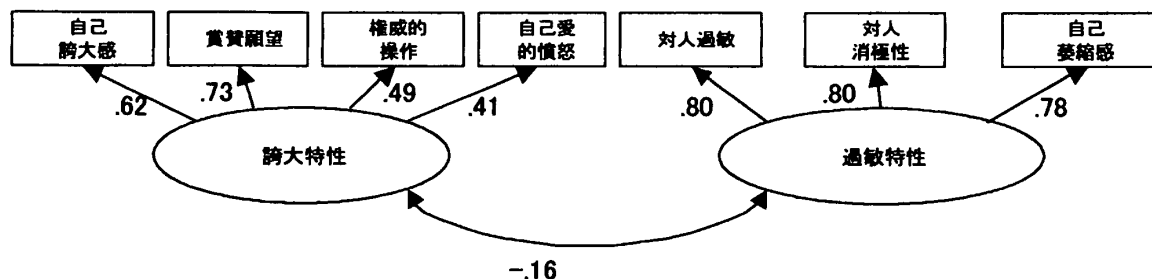


FIGURE 1 モデル1の確認的因子分析（誤差項は省略）

ての性質が強く見られ、そこに既に否定的に評価された自己イメージの影響が推測された。そこで、この観測変数は萎縮自己にも関係づけた。最後に、この傷つき易さは、対等な対人関係の形成を妨げ、支配・操作的な関係に限定された対人関係に導くものと考えられた。そこで、権威的操作も自己愛的傷つき易さに関係づけた。以上の他に、誇大自己と萎縮自己の2極構造から自己愛的傷つき易さがもたらされるという仮説に従い、双方から自己愛的傷つき易さへの因果関係を導入した。最後に誇大自己と萎縮自己の間に相関関係を仮定し、モデル2を完成した。これを検証するために、共分散構造分析を行った。結果をFIGURE 2に示す。測定方程式及び構造方程式の因果係数は、いずれも有意であった。GFI値は.960, AGFI値は.888であった。したがって、モデル全体の適合性は十分なものであり、モデル2の説明力は高いと判断できる。また、内生的潜在変数の決定係数(R^2)は.736であり、因果関係の規定力は高いと言える。

考察と今後の展望

本研究では、質問紙法を用いて、誇大特性と過敏特性を含めた全体的な自己愛的人格の特徴と、潜在的関係に関する仮説を検討した。新たに項目を収集整理し、自己愛的人格項目群を作成した。そして、それを一般青年545名に5段階評定で実施した。得られたデータに斜交回転による因子分析を実施し、7因子構造(対人過敏・対人消極性・自己誇大感・自己萎縮感・賞賛願望・権威的操作・自己愛的憤怒)を得た。その後、仮説を検討するため、共分散構造分析(構造方程式モデル)によるモデルの検証を試みた。その際、誇大特性と過敏特性が独自の潜在変数により規定されるとするモデル1と、誇大自己と萎縮自己の2極構造から自己愛的傷つき易さが生じるとの仮説に基づくモデル2を構成した。各モデルの適合度を算出した結果、モデル1は棄却され、モデ

ル2は十分な適合度を示した。

1. 自己愛的人格の諸特徴について

本研究では、包括的な自己愛的人格項目群を作成し、その特徴を検討した。得られた因子の内容から、自己誇大感、賞賛願望、権威的操作、自己愛的憤怒の各因子が誇大特性に属するものと考えられた。一方、対人過敏、対人消極性、自己萎縮感、自己愛的傷つき易さは過敏特性に属するものと考えられた。これらの因子の内容は、Gabbard (1994)の無関心型と過剰警戒型の特徴に概ね一致する。また、YG性格検査を用いた妥当性の検討では、因子分析に従って得られた下位尺度ごとに、概ね予測される相関関係が見られた。以上のことから、本項目群は誇大特性と過敏特性を含む包括的な自己愛的人格を評価するものとして、妥当なものであると判断される。

YG性格検査との関係では、その他にも有意な関係が見られた。誇大特性の下位尺度で、YG性格検査との相関係数のパターンに目立った違いが見られた。つまり、YG性格検査の情緒不安定性因子及び社会不適応因子との関係で、自己誇大感と賞賛願望は積極的な関係を示さなかった一方で、権威的操作と自己愛的憤怒は弱いあるいは中程度の正の相関を示した。前者の結果は、自己誇大感と賞賛願望が、抑うつ感や情緒不安定性、劣等感などの情緒の問題や空想性、協調性欠如などの社会的不適応と特に関係していないことを示唆している。誇大自己と萎縮自己の2極構造を仮定すると、この結果については以下の2つの可能性が考えられる。第1には、非常に理想化された誇大自己を持ちながらも、それに現実の能力が追いついていないため、情緒の不安定や社会的な不適応につながらない場合である。これは、いわゆる健康な自己愛に属する。もう1つは、現実自己が誇大自己から大きくずれているにもかかわらず、現実自己の方が無視される場合である。この場合、情緒不安定性や社会不適応性には結びつかないと考えられるが、現実が無視されている点では問

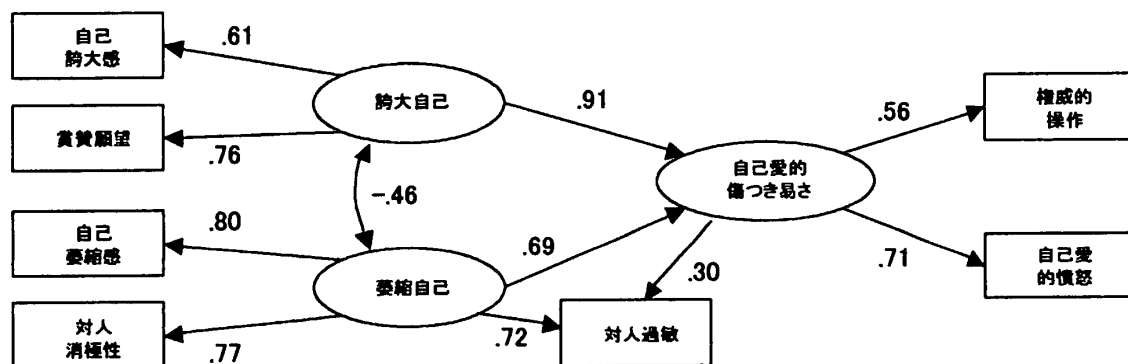


FIGURE 2 モデル2の共分散構造分析(誤差項は省略)

題が大きいと言える。以上のように考えると、これらの特性は、健康なものから問題の大きいものまで、幅広く自己愛的な傾向に見られる特徴であると思われる。一方、権威的操作と自己愛的憤怒は、情緒不安定因子と社会不適応因子と弱いあるいは中程度の正の相関を示した。このことは、これらの特性が情緒の不安定さや社会的不適応と正の関係にあることを示唆している。その意味では、誇大自己と萎縮自己の2極構造の中で、誇大自己の影響を大きく受けながらも、萎縮自己も無視されている訳ではなく、結果的に自己愛的な傷つきを感じやすくなっている人が示す特性であると考えられる。

過敏特性の各下位尺度では、YG 性格検査との相関係数のパターンに大きな違いは見られなかった。しかし、その値に注目すると、一定の関係が見られた。YG 性格検査の情緒不安定性因子と社会的不適応因子との関係で、対人過敏が最も強い正の関係を示した。このことは、対人過敏が強い人は、抑うつ感、情緒不安定さなどの情緒的問題や空想性、協調性欠如などの社会不適応性を強く示すことを示唆している。その意味で、対人過敏は、誇大自己と萎縮自己の2極構造の中で、萎縮自己にとらわれていながらも、誇大自己の影響も強く、結果的に自己愛的な傷つきを頻繁に経験する人が示す特性であると考えられる。ただし、対人消極性、自己萎縮感にも正の相関係数が見られることから、これらも誇大自己と強い関係にあるものと推測される。一方、YG 性格検査の主導性因子に注目すると、自己萎縮感と対人消極性が対人過敏よりも強い負の関係を示した。このことは、対人消極性や自己萎縮感を高く示す人ほど、支配的な姿勢や対人積極性が低いことを示唆している。したがって、これらは、過敏特性の中でも特に萎縮自己の影響を強く受けている人が示す特性であると考えられる。ただし、対人過敏も中程度の負の相関関係を示しているの、そこにも萎縮自己が強く関係しているものと言える。

2. 自己愛的人格の構造について

本研究では、自己愛的人格項目群の潜在的関係についてモデルを仮定し、その適合度を検討した。その際、誇大特性と過敏特性のそれぞれに対応する2つの潜在変数を仮定したモデル1と、極端に理想化された自己イメージとしての誇大自己、それに比して過剰に否定的に評価された萎縮自己、及び、他者からの否定的評価への過敏性である自己愛的傷つき易さの3つの潜在変数を仮定したモデル2を用いた。分析の結果、モデル1は棄却され、モデル2は支持された。両モデルの

比較という点では、適合度に反映される両者の違いは、基本的にはその潜在変数の数にあると考えられる。つまり、上記の結果は、誇大特性と過敏特性も含めた自己愛的人格の全体像を説明するためには、両特性に対応した別々の2因子を仮定するだけでは不十分であり、誇大自己と萎縮自己、及び、自己愛的傷つき易さの3因子を仮定する必要があることを示唆している。

次に、モデル2における各変数間の関係については、以下のように考えられる。まず、各潜在変数から観測変数への因果係数を見ると、誇大自己は自己誇大感及び賞賛願望と同程度の強い正の関係を示している。また、萎縮自己も自己萎縮感、対人消極性及び対人過敏に同程度の強い正の影響を与えている。以上の結果は、当初予測された関係が概ね再生されたものと言える。このことから、潜在変数の意味づけは妥当なものであったと判断できる。一方、自己愛的傷つき易さと各観測変数の関係は幾分複雑である。自己愛的傷つき易さは、自己愛的憤怒と最も強い関係を示しており、対人過敏及び権威的操作との関係は相対的に弱いものとなった。しかし、自己愛的憤怒は、他者からの否定的な評価に対する最も強い拒否的反応を意味する観測変数である。自己愛的傷つき易さが他者からの否定的評価への過敏さを意味することを考慮すると、このような因果係数の付置は妥当なものと言える。一方、対人過敏と自己愛的傷つき易さとの関係が相対的に弱いものとなったことは意外かもしれない。しかし、萎縮自己との因果係数が強く見られたことを考慮すると、この観測変数が実際の対人場面での傷つき易さよりも、萎縮自己を意識することから生じる予期不安としての性質が強いことを意味するものと解釈できる。

次に、潜在変数間の関係については以下のように考察できる。まず、誇大自己と萎縮自己は、ともに自己愛的傷つき易さに強い正の影響を与えている。この結果は、誇大自己と萎縮自己の2極性が、自己愛的傷つき易さを生じさせるという仮説を支持している。ただし、数値的には誇大自己の影響の方が大きく現れた。このことは、自己愛的傷つき易さに対する誇大自己の優位性を示唆している。理論的観点からも、この結果は支持される。なぜなら、誇大な自己イメージのみで否定的な自己イメージが定着していなくても、自己愛的傷つき易さは生じうるものと考えられるからである。その場合、他者からの否定的な評価は、全く予期されないものとして自己評価に大きな衝撃を与えるであろう。ただし、そのような経験が萎縮自己として定着しない場合も考えられる。一方で、萎縮自己のみでは自

己愛的傷つき易さにはつながらない。否定的で無力な自己イメージのみでは、抑うつや無気力といった状態に陥ることはあっても、対人場面での評価に影響される必然性はない。対人場面での傷つきにつながるには、誇大自己への期待が幾分かでも影響していて、それが他者からの評価によって傷つけられることが必要である。以上のように考えると、自己愛的傷つき易さにとって誇大自己は不可欠な要因であるが、萎縮自己は必ずしも必要ではない。否定的自己イメージの定着である萎縮自己は、対人場面における予期的な不安を増強させ、他者からの否定的評価への過敏性を強めたり、他者の評価を否定的に歪曲させて受け取りやすくさせるといった面で、自己愛的傷つき易さに影響を与える要因であると考えられる。以上のような誇大自己の優位性が、因果係数の配分に現れたものと考えられる。

次に、誇大自己と萎縮自己の相関係数は中程度の負の相関を示している。この結果は、誇大自己を強く持つ人ほど萎縮自己が弱いという関係を示唆するものである。その意味では、極端に理想的な自己イメージである誇大自己を持つ人は、現実場面で直面する自分を過剰に否定的に評価して萎縮自己を形成しやすいという理論的仮説とは矛盾する。したがって、潜在変数間の関係に関する仮説は、部分的に修正の必要があるかもしれない。ただし、この点については以下のような説明も可能である。岡野 (1998) は、極端に理想化された理想自己と、過剰に否定的に評価された恥ずべき自己の2極性の中で、個人がいずれを拠点とするかによって無関心型と過剰警戒型の特徴が現れると論じている。つまり、そこには2極性に対し、誇大自己にしがみつこうとする姿勢が強いのか、萎縮自己にこだわる姿勢が強いのかという個人の姿勢の影響が関係していると考えられる。その場合、誇大自己にしがみつこうとする人は萎縮自己には気づきにくいであろうし、萎縮自己にとらわれる人は誇大自己には気づきにくいであろう。そのような個人的な姿勢の影響が結果に現れたのかもしれない。ただし、これらの問題は本研究の範囲外であり、今後の研究により検討されなければならない課題である。そのためには、潜在的要因の性質に関するより詳細な調査・研究が必要であろう。

引用文献

- 相澤直樹 1997 対人場面における対人恐怖的な悩みの分析 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 548.
- Akhtar, S., & Thomson, J.A. 1982 Overview : Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12—20.
- American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (3rd ed)*. Washington, D.C. : Author.
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed)*. Washington, D.C. : Author.
- Asper, K. 1987 *Verlassenheit und Selbstentfremdung*. Olten : Walter Verlag. (老松克博(訳) 2001 自己愛障害の臨床 創元社)
- Elson, M (Ed.) 1987 *The Kohut seminars on self psychology and psychotherapy with adolescents and young adults*. New York : W.W.Norton & Company.
- Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM-IV edition*. Washington, D.C. : American Psychiatric Press. (館 哲朗(監訳) 1997 精神力動的臨床精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床篇 ; II軸障害 岩崎学術出版社)
- Hosoi, K. 1981 A developmental study of narcissistic tendency (2) : In adolescence. *Japanese Psychological Research*, **23**, 160—168.
- 狩野 裕 1997 AMOS, EQS, LISREL によるグラフィカル多変量解析 現代数学社
- Kernberg, O.F. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. London : Jason Aronson.
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York : International Universities Press.
- Kohut, H. 1977 *The restoration of the self*. New York : International Universities Press.
- 近藤三男 1995 自己愛型人格障害の症候学 精神科治療学, **10**, 1223—1229.
- Masterson, J.F. 1981 *The narcissistic and borderline disorders*. New York : Brunner/Mazel.
- Mullins, L.S., & Kopelman, R.E. 1988 Toward an assessment of the construct validity of four measures of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **52**, 610—625.
- Murray, H.A. 1938 *Explorations in personality*. New York : Oxford University Press. (外林大作(訳編) 1961 パーソナリティ I 誠信書房)
- O'Brien, M.L. 1987 Examining the dimen-

- sionality of pathological narcissism : Factor analysis and construct validity of the O'Brien multiphasic narcissism inventory. *Psychological Reports*, **61**, 499—510.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 1981 自己愛人間 朝日出版社
- 大石史博 1987 ナルシシズムの心理学的研究(1) 関西学院大学人文論究, **37**, 27—44.
- Raskin, R.N., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Rosenfeld, H. 1987 *Impasse and interpretation*. In D. Tuchett (Ed.), *New library of psychoanalysis*. London : Tavistock Publications.
- 高橋智子 1998 青年のナルシシズムに関する研究—ナルシシズムの2つの側面を測定する尺度の作成— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.
- 高橋 芳 1998 ナルシシズム的人格特性について—その下位カテゴリーの検討と防衛規制との関係 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集, 470.
- 田中康裕・穂苅千恵・福田 周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究, **12**, 121—131.
- 豊田秀樹 1992 SASによる共分散構造分析 東京大学出版会
- 辻岡美延 1965 新性格検査法 竹井機器工業
- 上地雄一郎・宮下一博 1992a 自己愛の発達と障害 およびその測定に関する研究の概観[1] 岡山県立短期大学紀要, **37**, 107—117.
- 上地雄一郎・宮下一博 1992b 自己愛の発達と障害 およびその測定に関する研究の概観[2] 岡山県立短期大学紀要, **37**, 118—127.
- Wink, P. 1991 Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590—597.
- 八木俊夫 1987 YG性格検査 日本心理技術研究所

謝 辞

本調査にご協力いただいた方々に心から感謝いたします。また、本論文の構想・作成にあたり、大阪大学大学院人間科学研究科の倉光修先生、老松克博先生及び、神戸大学発達科学部の谷冬彦先生から貴重な助言をいただきました。記して感謝いたします。

(2001.9.20 受稿, '02.1.23 受理)

Grandiose Traits and Hypersensitive Traits of the Narcissistic Personality

NAOKI AIZAWA (GRADUATE SCHOOL OF CULTURAL STUDIES AND HUMAN SCIENCE, KOBE UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 215—224

The main purposes of the present study were to construct a narcissistic personality questionnaire measuring grandiose traits and hypersensitive traits, and to examine the structure of the narcissistic personality. A 67-item questionnaire was administered to 545 undergraduates, together with 10 subscales of the Yatabe-Guilford (Y-G) Personality Inventory. Promax factor analyses on the narcissistic personality questionnaire yielded 7 factors : "Hypersensitivity," "Hesitation," "Sense of grandiosity," "exhibitionism," "Sense of powerlessness," "Authority-manipulation," and "Narcissistic rage." The internal consistency of each subscale was assessed with item-total correlations and Cronbach's alpha coefficient. The relation between the subscales and the Yatabe-Guilford Personality Inventory was examined. The results confirmed the concurrent validity of the narcissistic personality questionnaire. Next, covariance structure analyses were carried out to investigate 2 hypotheses : Hypothesis 1, that narcissistic personalities have 2 latent factors, "Grandiosity" and "Hypersensitivity," and Hypothesis 2, that grandiose self-image and powerless self-image influence narcissistic vulnerability. The results showed that all coefficients relating to both hypotheses were statistically significant, but the goodness of fit index was high enough only for Hypothesis 2. The present results suggest a comprehensive point of view of the narcissistic personality.

Key Words : narcissistic personality, grandiose traits, hypersensitive traits, narcissistic vulnerability, covariance structure analysis